

サミット開催の弊害

大湾 朝公

昨年の暮れあたりからだろうか、県内至る所で道路工事のための渋滞が多くなった。特に急用で高速道路を利用しているときに2キロの渋滞という案内板を見ると無性に腹が立つものである。「金出して渋滞か、金返せ」と本当に言いたくなる。普段からあまり渋滞経験がない沖縄で何故渋滞なのか。昨年4月、サミット開催が決定し、その関連工事が原因である。少し心引いて見ると、「こんなで間に合うのか」「道路がこんなに悪かったらサミットと関係なく直すべきだろう」と思う。

今年4月から名護の保育園に就職が決まった卒園児の話。アパートがなかなか決まらず保育園近くの民宿

に1年間住む契約をしたのだが「7月はサミットで1ヶ月だれも泊めるなどいわれているから、その間は出ていってくれ」と言われたそうである。何故、サミットと彼の夜露を防ぐ場の確保が関係あるのか、私自身も憤慨にたえない。

夜、帰宅途中の道路の電光掲示板での気になる言葉に「サミット期間中のマイカー自粛」「商業用車両は深夜又は早朝に搬入を」というものがある。バス以外に公共交通手段を持たない沖縄で車は足

である。車に乗るなどということは、人が動かず、経済も休止しろというものである。県民の生活の奪っても本当にサミットを沖縄でする意味があるのかと思う。

少し唐突な形で書き出したが、今、私の思いはサミットというイベントがいかに県民生活に弊害を与えているか知ってほしいという思いからである。



辺野古の海岸

る。しかし最大の弊害はサミット開催と同時に与えられた普天間基地の代替としての辺野古への移設建設であろうと思う。クリントン大統領が昨年6月「沖縄サミットまでに普天間問題の解決を」という発言を受け、急速に動きがあり、昨年末当該地、名護市の岸本市長の受け入れ発言まで

に至った。サミットも辺野古も同じ名護市である。考えようによっては、たった三日間のイベントで恒久的な危機を受け入れたのである。

サミット会場地域の海の珊瑚は環境破壊によって白化している。ジュゴンの住む辺野古の海が死んだ海にならないように私達は何をしなければならぬか、個人として、教会として考えていきたいと思う。

（おおわん・ちょうこう 沖縄教区信徒）

— 目次 —

- | | |
|--------------------|--------------------|
| 2. 時のしるし | 8. 精神障害者が地域で生きるために |
| 3. 石原都知事民族差別発言抗議声明 | 9. センターを利用する人々 |
| 4. 香山洋人さん講演録 | 10. パンチョギの家族日記 |
| 6. 済州島通信⑤ 最終回 | 11. ご支援くださった方々のお名前 |
| 7. こんな本あります | 12. お知らせ・余韻 |

石原都知事の三国人発言について、少し違った角度から考えてみた。彼には、自分はこれまでの大臣諸氏のように、言いたいことをはっきり言えないような政治家じゃない、という自負が、心理的に強く働いていたと思う。誰かに迎合したり、誰かの手前を気にしたりせずものが言える、そして、言ったことをすぐに撤回したり謝罪したりしない・・・という自負が。しかし、言いたいことを言うということと、言いたいことに明確な裏付けがあるかどうか、それが適切な言葉・表現であるかどうかを検証せずに発言することとは、わけがちがう。私たちの通常の会話でも守られるべきことだが、こともあろうに地方自治体の、しかも首都を有する東京都の知事にそれができなかったというのだから、とんでもない話なのである。さらに、その都知事を選んだのは都民なのであるから、日本人の見識はいまだにこの程度だったのかと落ち込んでしまう。謝罪と辞任を強く求めたいと思う。

しかし、これまでの例でもそうであるように、当事者はごく普通に、ごく自然に言葉を発したにすぎないのであるから、それを「暴言」や「放言」と攻めたところで、感情的になるばかりか、開き直るしかないだろうし、仮に謝罪がなされても、辞任回避のための方策でしかないだろう。何度も繰り返される同種の事件を経験して、これはもっと根本的な人間としてのあり方、生き方の問題に関わってくる問題なのだと感じている。何か、人間として培っていかねばならない大切なものの欠落を感じるのである。今回の発言事件を見聞きして私が強く感じるのは、石原東京都知事という、一人の67才の男性の、人間的成長のレベルの低さである。

「不法入国した」という条件をつけて言っているのだから、在日韓国・朝鮮人のことを指すのではなく、あくまで不法入国した外国人について言っているのだという見方が大勢である。しかし、三国人という言葉の使用そのものが問われるべきであるから、それに何が条件づけられていようが根本的には変わらないのであるが、「不法入国した」という表現には、二つの欠落があると思う。一つは、「不法」といっても、何らかの理由で日本に居住している人たちが正規の在留資格をもてないで

いるのは、むしろその法律の方に問題があるということだ。それが不法とならざるを得ない、日本の外国人受け入れ政策の貧弱さの結果なのである。ここには、ものごとの現象面だけをとらえて、それを善悪のはかりにかけて、判断するという誤謬がある。なぜそのようなことが起きているのかという、その現象の原因、事実の本質を見抜く能力の欠如である。

もうひとつの欠落は、不法入国した外国人＝犯罪者というステレオタイプの見方である。人間をカテゴリーでしばることの愚かさが、またしてもここでも飛び出たのである。私たちも、残念ながらそういう見方が頭にしみついてしまっているもので、どうしてもそういう目で物事や人を見がちである。しかし、そのことを認識していれば、常に、そのことに留意ができる。つまり、自分の言動がそのような見方をしてしまっていないかどうか、常に自己検証を続けることができるのである。それがまったくなされなかったのが今回の発言である。作家として一世を風靡し、最高の人気を得て国政に携わり、さらに現在首都を有する自治体の長にまで選ばれた人にして、人間として発達していかなければならない部分の成長が止まっていたのか、としか思えない。不法入国という社会的事実に対して、構造的な理解ができず、さらに、自らの言動に対する検証、吟味、自己反省ができなかったのだ。

社会の本質を見抜く目もち、自己検証を行えるようになることが、年齢を重ねるにつれ、キャリアを積むにつれ、発達していく人間のすばらしさであると思う。年齢とキャリアを積んだ知事が、この点において欠落していること、これは知事自身の問題であるが、日本人の問題でもあると思う。まず、私たちは、その言動に対して、強く抗議の声を上げなければならない。この言動に対する彼なりの決着をつけてほしい。しかし、彼をしてそのような言動に至らしめた根本的な部分、人間としての問題はそれだけでは解決しない。これを解決しないと、同じことが、同じ人間によって、また他の異なる人間によって、何度も繰り返されていくことだろう。これは時をかけて解決していくしかないのだろうか。

(まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒)

石原都知事の歴史観

松山 献

石原慎太郎東京都知事による民族差別発言に抗議し、 発言の撤回と東京都知事の辞任を求める声明

4月9日石原慎太郎東京都知事は陸上自衛隊練馬駐屯地における創隊記念式典での挨拶で、「三国人、外国人が凶悪な犯罪を繰り返しており、大きな災害では騒擾事件すら想定される。警察の力には限界があるので、みなさんに出動していただき、治安の維持も大切な目的として遂行してほしい」と発言しました。

「三国人」という言葉は第2次大戦敗戦後、日本国内でそれまで居住してきた旧植民地出身者(在日朝鮮人・台湾人等)に対する新しい差別語として生み出されたものであります。戦前の日本は植民地出身者に対する民族差別、強制連行、強制労働が行われてきました。その人たちは日本の敗戦により解放され自由な民族として当然の権利を保障されるべきでありました。しかし日本を占領した連合国軍は在日する旧植民地出身者を解放国民としてではなく戦勝国民、敗戦国民でもなく「第三の人々」と規定しました。その際に新たな「第三国人」という差別語が作られたのであります。これは戦前日本人が抑圧していた旧植民地出身者が「解放された人々」として生きようとする姿に反発を持った日本人が旧植民地出身者を侮蔑するための呼称であるのは明らかなことであります。

敗戦の時点で、アジア侵略を総括せず、戦争責任、戦後補償をアジア諸国並びにアジア人に対して行わず、むしろ戦後の冷戦構造の一方に組することで利益を得てきた日本の戦後そのものが「第三国人」という差別語に象徴されているのであります。その結果、日本の一般民衆の中には在日韓国・朝鮮人、台湾人、中国人更に、アジア人に対する差別意識が現在にまで温存されている一因になっているものです。

石原東京都知事は「不法入国、滞在している外国人」についてであり、在日韓国・朝鮮人、台湾人に向けたものではないとの弁明を繰り返していますが、正規の在留資格を持たない外国人は現在約30万人居住しているといわれている。その彼らの大半はいわゆる日本人がいやがる職種に就き、底辺で日本社会を支えているのである。むしろ日本社会はこれらの人々に正当な在留資格を与えて、彼らが不当な扱い(在留、就労、教育)を受けないような施策を実施することが求められているのである。更に警察統計でも「来日外国人」による刑法犯検挙数はここ数年一環して減少しており、凶悪犯罪の増加もなく、むしろ減少傾向にあることが報告されているのです。

私たち、日本聖公会は宣教活動の一環として在日外国人との共生を願い、滞日フィリピン人の支援として「カパティラン」(東京)、「国際子ども学校」(愛知)、在日韓国・朝鮮人の課題に取り組む「聖公会生野センター」(大阪)の働きを行い、更に各地で草の根の現場で様々な活動に取り組んで

います。そして1995年の阪神・淡路大震災の際に被災地の現場で救援活動、ボランティア活動に従事した経験からも「来日外国人」による「騒擾」なるものは一度もなく、むしろ在日韓国・朝鮮人をはじめとする旧植民地出身者が関東大震災の朝鮮人虐殺の悪夢を再現させないようにと積極的に在日外国人が日本人に働きかけ、共同して震災後の救援活動に携わったことを身をもって体験いたしました。そのことからこれからの日本は在日外国人と日本人との協働により豊かな社会が作られていくものと確信しております。

今回の石原発言は彼が持つ外国人に対する排外主義に基づいて、いたずらに「外国人は恐ろしい」という意識を植え付けようとするものであります。そしてその発言が日本の首都である東京都知事によりなされたことは重大な問題を含んでいます。本来、自治体行政の長はそのようなことが起こらないように努める義務があり、逆に民族差別、排外主義の動きがあればそれを是正する積極的な施策を推進せねばならない立場にあるにもかかわらず、その立場にある石原東京都知事が差別排外意識を扇動する発言を行い、その後の記者会見等でも居直りとしかと思えない発言を繰り返していることを見ると、すでに彼には東京都知事の資格があるとは思えません。

今回、ほとんど死語になっている「(第) 三国人」という用語を出してまで外国人に対する差別排外主義を露わにし、多くの人々にその意識を植え付けた石原東京都知事の責任は重大なものとあります。私たちはこの間の一連の発言の撤回と謝罪、そして即時の東京都知事の辞任を求めるものであります。

更に、これまでの発言を撤回、謝罪せず、辞任しないならば彼を都知事に選んだ東京都民の良識の力により石原東京都知事のリコールがなされるよう東京都民に訴えるものであります。

2000年4月20日

日本聖公会管区事務所	総主事	司祭	奥石 勇
同	宣教主事	司祭	前田良彦
同 学生・青年運動協力委員会	委員長	司祭	野村 潔
同 部落差別問題委員会	委員長	司祭	田光信幸
同「正義と平和」委員会	委員長	司祭	柴本孝夫
同 天皇制・靖国問題委員会	委員長		佐治孝典
同 日韓協働委員会	委員長	司祭	宮嶋 真
同 訓練計画委員会	委員長	司祭	吉田雅人
同 東京教区カパティランプロジェクト	リーダー	司祭	宮崎 光
名古屋学生青年センター	総主事		池住 圭
愛知聖ルカセンター	総主事		池住 圭
聖公会生野センター	運営委員長	司祭	木村幸夫
同	主事	呉光現(オ・クァンヒョン)	
大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会	委員長		松原恵美子

地域とともに歩む信仰共同体

香山 洋人

私は1996年の秋から1999年の春まで韓国の聖公会大学に留学していました。日曜日には大学の近所の教会や、これからお話する分ち合いの家などに行っていました。その中で見聞きした事をお話したいと思います。

共同体 はじめに、「共同体」をひとつのキーワードにしたいと思います。わたしたちの信仰によって仲間がいるということは、とても大事な事です。キリスト教の信仰にとって共同体性というのは、命綱のようなものです。イエスの活動の最初はまず、弟子を集めた。最初に仲間を集めたんですね。イエスの弟子たちは、ともに歩む仲間でした。弟子たちだけでなく多くの人々がイエスとともに歩みました。この共同体は、終末的共同体と言われます。それは、この世のすべての問題が解決され、神様がすべてを支配する、そういう終わりのときを先取りするものです。またイエスの共同体の特徴は、食卓を常に囲んでいるということです。いつもイエスは弟子たちや時には論争相手と食事をいっしょにしています。一緒に食事を分かち合う中でイエスはさまざまな事を話し教え、そこで人と出会い、食卓の共同体を作っていたと思います。



そしてイエスが復活した後、弟子たちが新しい共同体を作っていきます。初代教会がイエスの共同体運動を継承していきました。使徒言行録を読むと、すべての人が自由で平等な解放的な共同体ができ、また目指していた事がわかります。

私たちの信仰、教会の動きというものは共同体のあり方がどうなっているかということを見つめる事がたいせつなのだ。ということをはじめに申し上げておきたいと思います。

分かち合いの家の始まり 分かち合いの家が始まった背景には当時の韓国の状況があります。当時は軍事独裁政権の中、金を持っている人はますます金持ちになり、貧しい人はどんどん貧しくなりました。そのなかでクリスチャンたちは、貧しい

からといって虐げられない、弱いからといっていじめられないそういう世の中を作っていこうと努力していました。

最初の分かち合いの家は上溪洞（サンゲドン）というソウル市北部の山の斜面のむらに聖公会の青年たちが貧しい人たちの地域に入って共同生活を始めました。ボランティアを募り、近所の子どもたちと遊んだり、保育をしたり、読み書きの出来ない人たちのために識字学級を始めました。また会社に解雇された人がいると聞けば、その人のために一緒に会社につけ合いに行くとか、労働者が自分でわずかなお金を出し合って小さな工場を作って、自分たちで生産し販売するような、つまり経営者に搾取されないような工場を作るなどといった活動を始めました。

大切なこと 分かち合いの
家が大事にしていた事は、
いくつかポイントがありま
す。まず、さまざまな活動
はクリスチャンというアイ
デンティティを大切に
キリスト教の運動としてや
る。まさにイエスに従っ
ていくイエスの共同体運動
を継承する事だ、というこ
とを明確に持っていました。

そして聖職者個人が、個人プレイでやるのではない。大韓聖公会全体がこれにかかわる運動だということです。そして3つ目にいわゆる教会を立てる運動ではない。ということです。全国に10ヶ所ある分かち合いの家の建物はビルだったり、家だったりします。そして整った礼拝堂也没有せん。私が通っていた奉天洞（ボンチョンドン）というところでは、ひとつの部屋とそれに付随する4つの部屋と事務室がありまして、そのまんなかの部屋では日曜日になると聖餐式をする、聖餐式が終われば、向きを変えて一緒にご飯を食べる。ご飯が食べ終わればそこで会議をする。平日はそこが子どもの勉強部屋になり識字学級になり住民の会議をやったり保育をしたり一軒の家の中でいろんな営みがあるというスタイルなんです。そこにはわれわれがイメージしているような形の教会を作

ってこうということではありません。そして、教会が地域活動を行うのではなくて、地域活動が教会になっていきます。地域活動というのは、結局は人と人が出会う事ですね。お互いの痛みや喜びや必要など深い部分で出会います。それをクリスチャンとして活動する中で、その交わりは結果的にはあのイエスの共同体運動の中身を持ち始めます。地域活動を通して出会った人々の交わりの中身がイエスが行っていたような解放的で自由なそして未来を先取りするような交わりとなっていく。それを私たちは本当は教会と言いたいのではないのでしょうか。

分かち合うということ 本
当の意味で物事を分かち
合うという事は人間的な知恵
や良心とか感性とかという
次元ではできない、究極的
には、信仰の次元、超越的
な次元、死ぬ事によって生
きるというような信仰に立
たないかぎり、自らのもの
をささげるといふ事はでき
ないと思うんですね。

分かち合いの家は体で福音を語り、身をもって福音を示していく、教会はよいサマリア人のたとえを言葉で語りますが、分かち合いの家は身をもって示し、その姿をみて、なるほど人はこうやって生きるんだと見てくれるに違いない。そして背後にあるイエス・キリストに出会うに違いない。言葉や文字は使わない。体で表現していく、証していくということです。

貧しい人のためではなく、貧しい人とともに、貧しい人になるのではなくて、貧しい人になる。そういうスピリット、考え方が分かち合いの家にあると思います。

1986年に始めた当初は3人が小さな4畳半に共同生活しながら、がんばってきました。ときにはお金がなくて、赤十字が配っているラーメンで1ヶ月食いつないだとか。貧しい人とともにではなく本当に貧乏になっちゃったんです。ほんとに貧しくなって暮らしていた。そういうなかで分かち合いの家の運動が広がっていきました。

分かち合いの家の活動 実際の活動を少し紹介しますと、全国には10ヶ所、ソウル教区には5ヶ所の分かち合いの家があり、それぞれがそれぞれの事業をしています。たとえば奉天洞の分かち合い



の家では、青少年事業、障害者自立事業、家庭結縁事業（給食・生活支援、グループホーム、識字学級）、地域福祉・住民支援事業、フードバンクなどがあります。1997年に経済危機で韓国が大変になったときに、200万人の失業者がでました。公的な支援も追いつかないとき、食事の支援をするこの活動が始まりました。ほかに、自活支援事業という、職場を自分たちで新しく作り出し、搾取されないような職場をつくりだす活動があります。また、家族単位での野宿者のシェルターがありま

す。ほかに社会福祉分野の出版事業もあります。

これで1ヶ所の分かち合いの家の行っている事業です。

神様からのお恵み さいごに奉天洞分かち合いの家の宋（ソン）神父が日本での講演のときの一言を紹介したいと思います。「クリスチャンが神を愛するという事と隣人を愛するということ

は同じ重さなのではないでしょうか。しかし、どうやって神様を愛したらいいかわからないからわれわれは隣人に会い、どうやって神様に仕えたらいいのかいいのかわからないから隣人に仕えるのではないのでしょうか。そしてどうやって神様からお恵みを希望をいただくのかといえば、それは隣人を通してうける。隣人から、人々が生きる姿をみて希望をいただいている。これがまさに神様からいただくお恵みなのです。」

(かやま・ひろと 執事・立教大学チャプレン)

2000年3月5日 大阪聖愛教会にて 文責：編集部

『分かち合いの家 宣教10年』（香山洋人さん翻訳）は
聖公会生野センターでも取り扱っています。

風まかせ
人まかせ

大坂市天王寺区玉造本町12-1
Tel/Fax 06-6768-1340

大阪環状線・大正
「玉造」下車…徒歩4分
「鶴橋」下車…徒歩6分
(黒山山文堂点の横)

毎月 第2土曜日 「ひきたま ライヴ」
第3土曜日 「Keru ライヴ」
毎月 土曜日 「越前 ライヴ」
第3金曜日 「孫侍歌宴」(渡辺栄三先生)
水曜日 「茶鏡法歌宴」(阿部美里先生)

フツのメニューにあきた人
おもしろいこと好きな人
フツの音楽好きな人
みんなみんなチャンプルー

ランチ & 喫茶 タイム am9:00~pm6:00
居座屋タイム pm6:00~(飲オースターpm10:30)
(休日・日曜・祝日)

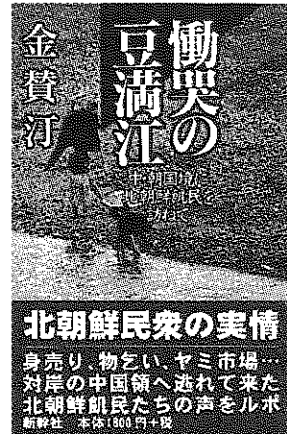
仕出し弁当、オードブル、各種宴会等、ご注文承ります。

本から「在日コリアン」を考える①

高二三

『慟哭の豆満江』

—中朝国境に北朝鮮飢民を訪ねて—



金賛汀 著

新幹社刊 1,800円+税

12回にわたって「大阪考」と題して書いてきた。ネタも切れたので連載をやめたい旨、伝えたところ、編集部の方から新シリーズで、ということになり引き受けることになった。読者の皆さまには申しわけないのですが、本にまつわるウラ話を続けますので、これからもよろしくお願いいたします。

新幹社の刊行物は北朝鮮に関する本が少ない。理由はないのだが、しいてあげれば韓国・北朝鮮、ほくにとっては本国に関する本より、在日の本を出さねば、という気持ちが強かったからだろうか。それに加えて、北朝鮮に関する本の適当な著者、内容に出会わなかったからだ。

しかし、関西大学の李英和さん、耽羅研究会の金民柱さん、そしてライターの萩原遼さんなどが知人だと知れば、そんないいわけは嘘に聞こえるかもしれない。そこでは宣伝力をもたない小出版社としての悲哀があることを理解していただきたい。僕の知人たちは、講談社や文芸春秋で本を出すことのできる人たちなのである。

キム・デンタルクリニック

院長 キムドゥヨン (金道栄)
TEL (06) 6744-1114

何年前のことか忘れた。韓国からきた詩人の金明植さんと金石範先生、文春や集英社の編集者と新宿の「明洞」で食事をしたことがあった。そこで大阪から見えていた姜在彦先生と偶然に出会った。そして合流することになった。

すっかり酩酊していた姜在彦先生は大声を出して、ことさらにぼくに当たった。君はなぜ共和国(北朝鮮のこと)の惨状を知りながら本をつくらないのだ、少し出版の傾向が片寄っているのではないか、そのようなことをおっしゃった。

しかし姜先生はぼくに対していったのではなかった。韓国から来ているお客さんに、当時、韓国での民主化運動は「主思派(主体思想派)」といわれる人々が力をもっていて、それらのことを批判しているのだった。同行の編集者たちは、ぼくが大声を出されたので心配してくれたが、ぼくはあまり気にしていなかった。

「ほるもん文化」の編集でもそうだが、本国のものを翻訳紹介する資金やスペースがあったら、在日のことをやらねばならない、といつも考えている。北であれ南であれ、本国(志向)への批判は「ほるもん文化」を出していること自体で批判していると思っている。

そんな経緯をもちながらも、今回『慟哭の豆満江』を出した。ここ数年、日本の出版界では「北朝鮮もの」は売れている。しかし売れていることが日本人にとって、より深い北朝鮮理解になっているかというところ、そうでないところが問題である。飢民越境者というキイ・ワードから北朝鮮をみるのが北朝鮮のすべてだとは思わない。だが、北朝鮮は日本にとっては国交回復(植民地支配の清算)をしなければならない国である。在日にとっては60万分の10万、つまり6人に1人は北への「帰国者」を家族に持つ身である。そんな立場で、もっと北朝鮮を知る確かな情報となる本を作らねばと思った。関心を持っていただければ幸いである。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『慟哭の豆満江』は
聖公会生野センターでも取り扱っています。

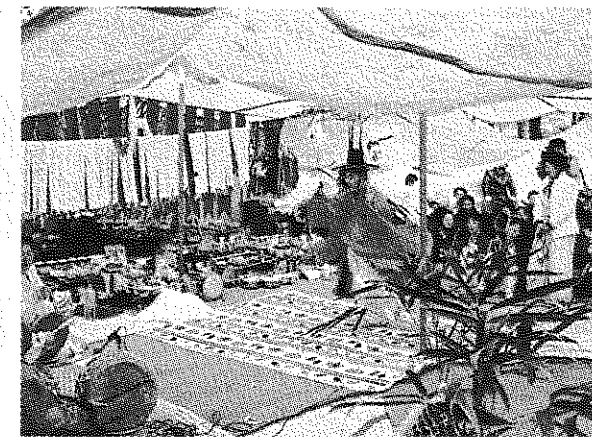
最終回

文京珠

兄弟たちの四季 ふたたび桜のころとなって、済州での生活によいよ別れを告げるときが来た。別れの挨拶とか、資料の整理とか、帰り支度とかにバタバタ追われるなかでも、この特別な1年のことがとりとめもなく蘇える。父の「4日葬」(報告②)に始まり、ほとんど半世紀ぶりに帰郷した母との一月余りの生活、どういう訳か農閑期にやたらと多くなるチェサ(法事)、思いのほか簡単に終わったボルチョ(一族の墓の雑草刈り)、秋夕での身内のいざこざ、半日働いて農協への出荷額が2万ウォンにもならなかったミカン摘み、いとこの息子の結婚式、賑やかな旧正月、中年男の一人暮らしが信じがたい、といった感じの済州市に住む二人の姉(下の姉は洗濯やおかずを毎週まかってくれた)、金寧里の田舎へは済州市の中心部からさらに30分余り、北済州の海岸道路を弾丸のように走り抜ける長距離バス、午後8時を回っても沈もうとしない、車窓に映えた7月の夕陽、8月の台風と豪雨、秋の紅葉、冬の大雪、私の済州での生活は、そんなふうに、兄弟たちとのかかわりを軸に四季を一巡りして終った。私は、日本で両親のもとに育ち、兄たちは済州で外祖母のもとに育った。私の側に負い目がないといえば嘘になる。そういう溝を、日常の自然なやり取りや触れ合いのなかで少しでも埋めることが出来れば、という思いが私にはあった。兄たちの生活の糧となる農業は、問答無用の「市場」の論理になすすべもなく揺れ動いている。そんななかでも兄たちは、村の共同体の和を支える儒教的な習わしや義理をかたくなに守りつづける。そういう、済州の田舎の暮らしに直に触れ得たこと、しいて言えば、それが私の済州での生活の一番の収穫だったかもしれない。

新しい時代 肝心の研究や4・3事件の取り組みを通して接した世界も、もちろん、済州のもう一つの姿として私の中に収められている。豊かな自然のなかに伸びやかに広がる済州大学、一人暮らし

には広すぎる緑のなかの教員宿舎、ちょっとお節介な教員宿舎の守衛のアジョシ、51周年の慰霊祭に始まる4・3事件関連の行事や取り組み、ウリマルの表現力の拙さにいつももどかしい思いをさせられたセミナーや研究会での報告や議論、マダン劇やソリ・ペ(民謡劇?)の人びととの交流、そして講義を通しての学生たちとのやりとり。もちろん、むき出しの本音のつきあいとまでは、なかなかいかない。正直いうと、「部外者」や「よそ者」



済州島の伝統的な祭り ヨンドンハルマン祭

といった気分には打ち沈んだことも何度かある。それでも、人とのつきあいがそもそも不器用な私には上出来な1年だったかもしれない。4・3事件との関わりでは、ほとんどシック(身内)ともいえるつきあいの基礎もきづけたのである。

ともあれ、済州は、4・3事件の深い傷を負った島である。権力へのわずかばかりの異議申し立ても、即、死につ

ながるといふ、とてつもない恐怖の記憶が久しくこの島をおおってきた。80年代に始まる民主化へのうねりは、そういう済州の社会にも及び、中央への抵抗や自治にまつわるこの島の伝統を蘇らせている。いまや、この済州でも民主化の陣痛の時代に青年期をへた世代が一つの分厚い層をなし、研究や4・3事件の取り組みを通して関わった友人たちもほとんどがこの世代に属していた。中央の意向や陸地の大資本に翻弄されるばかりであったかつてとは違って、済州の未来を左右するのは、この島の「自治」にまつわる彼らの強い意志にほかならない。そういう新しい時代への息吹を多少なりとも分かち合えたこと、なによりもそのことがかけがえのない資産として、いま、私の手の中にある。

済州大学へとみちびく桜並木に、また、花が咲き始めて、私のここでの生活の終わりを告げている。

(むん・きよんす 立命館大学教授)

精神障害者地域生活支援センター「すいすい」の解説をめぐる雑感

林 明

地域生活支援センターをやりたいとの話が、呉さんや岡本さんからあったのは一昨年（1998年）夏ごろだったと思う。社会福祉法人のような法人格を有しない団体が地域生活支援事業を実施できるのか、1999年度から実施できるのか、国や大阪市の補助・予算はつくのかなどさまざまな課題があったものの、担当係長や運営団体H I Tの懸命な努力が実り1999年4月から事業委託できる運びとなった。

しかしながら、昨年6月の開設を目前にした5月末から、地元町会をはじめ連合町会一丸となった反対運動が、運営団体に対してよりも、特に行政をターゲットとして大きくなった。その理由としては、「事前の説明がなかった」、「設置場所として不適当である」などであった。

6月11日に地元小学校で行われた、連合町会住民70～80名と私たち行政との話し合いでは、さらにエスカレートし、「精神障害者は何をするか分からない」や「設置場所周辺は通学路であり、子どもたちにとって危険である」など、誤解と偏見に基づく発言が次々と浴びせかけられ、私たちが、怒りの余り冷静さを失ってしまうほどであった。

その際何度も念を押されたのは、「住民の同意がなければ開設をしないと約束せよ」ということで

あったが、ここで約束してしまうと「すいすい」の開設は実現しないとの思いから、「この施設の開設には住民の同意は必要ない」で押し通した。これが結果的には住民に最後は「我々の同意がなくても施設は開設される」という諦めの気持ちを抱かせるのに大きな役割を果たしたのではないかと後になって思ったものである。

この度の反対運動で特徴的なことは、単にビラやチラシに止まらず、ノボリが数多く立てられたことであり、この新手は後に阿倍野区美章園の障害者施設反対運動でも用いられた、しかし、ノボリが林立するなかで施設関係者や利用者（精神障害者）は約半年間、大きなプレッシャーと闘いながら通所したのである。何物にも代えがたい犠牲も生まれており、私にとって、終生忘れない出来事となった。

とはいえ、辛い思い出ばかりではなく、元気づけられる出来事もあった。先の住民との話し合いや7月1日に行われた反対集会などで、落ち込んでいた時、「すいすい」に1通の匿名の手紙が投げ込まれたのである。それは、反対住民の言動等を非難し、施設開設を強く支持するものであり、私自身この手紙によって大変励まされ、再度反対住民に立ち向かう勇気を与えられたのである。

最後は12月8日の協定書締結によって解決が図られたわけであるが、この間家主から住民への仮処分申立や、実態として施設を運営してきたこと、さまざまな啓発活動、何度なく重ねられた話し合いなど、多くの積み重ねがあつて今日に至ったものであり、施設を提供して頂いた家主さんや、運営団体H I Tの並々ならぬ努力はもとより、連合町会長はじめ地元町会役員の皆さんにも、今は感謝の思いで一杯である。

まだまだ、多くの語り尽くせない事柄があるが、紙数の都合上ここで筆をおきたい。

（はやし・あきら 前・大阪市環境保健局連絡主幹）



作業所のレクリエーション

精神科 神経内科 キム診療所

〒537-0013 大阪市東成区大今里南3-13-13
高クリニックセンター3F
TEL(06)6973-8282 FAX(06)6973-7733
近鉄今里駅から徒歩3分

診療時間

受付時間	月	火	水	木	金	土
AM10:00 ～PM1:00	○	○	／	○	○	○
PM4:00 ～PM7:00	○	／	／	○	○	／

日曜・祝日は休診

介護されている介護ボランティア

猪口 雅夫

昨年、大阪市のボランティア情報誌「コンボ」の情報マーケットに「絵画教室で介護を・聖公会生野センター絵画教室」「地域福祉活動。絵画教室に通う小学生～18歳の身体及び知的障害者（児）の介護をお願いします。一緒に絵を描きながら、必要なときに介護します。」と掲載されていて、昨年の3月24日に電話をしたのが始まりである。

電話した理由は、約1ヶ月前の父の「死」にある。

それまで「死」は、他人事のようでしかなく、積極的に考えたこともなく、どちらかといえば回避してきたのだが、「死」は確実に誰にも平等に訪れる。39歳の私は、もうすでに人生の折り返し点を通過。復路をゴールに向かって走っている。そう考えると実に寂しく思えた。

また、あと半分の復路

も往路と同じように、周りの景色を見ず、仕事と家庭だけに向き合って走りつづけることにも疑問を感じてきた。自分の周りで起きていることに、もっと興味を持ち、何か行動しなければと思うようになった。そして今まで、どちらかというところ、福祉、介護という言葉には、私の中では重く、暗いイメージで興味はあっても踏み出せなかった。しかし限られた「生」のなかで躊躇することは、大きなロスタイムであると思えた。また「一緒に

絵を描きながら」という言葉が後押しとなり、好きな絵画を通して活動するのなら、何か自分にもできそうな気がした。

現在1年が過ぎ、ここは自分にとって、とても居心地の良い場所となった。もちろん、彼・彼女たちの汚染されていない魂が精神がそのまま画面に現れていてそのキラキラとした作品に接する嬉しさもあるが、絵を楽しんで書いている姿、お互

いを思いやりいたわる姿はさわやかで、その姿を見ているだけでも幸せになってくる。

そしてつくづく思うのだが、自分は介護ボランティアに来ているのではなく、介護されるためにここに来ているのではないかと。

障害をもつ彼・彼女たちの魂の深さと広がりの中

に私が生かされ、癒されていると感じるのだ。

（いのぐち・まさお 絵画教室ボランティア）



絵画教室で写生会に行きました。

そして…

介護されている介護ボランティアの私が、彼・彼女たちに何かしてあげられることは何かないかと考え、展覧会を企画しましたので興味のある方は、ぜひご覧いただければと思っています。また、展覧会の運営方法として、障害をもった彼・彼女たちの展覧会というのでは、障害を負ったイメージでとらえられてしまい、本当の才能を理解してもらえそうになく、障害者とかかわっている人達だけにしか見てもらえないような気がするのです、いろいろな人々、いろいろな分野の作品、できればプロの方にも賛同して出品していただきたいのです。紙面をかりてご協力をお願いいたします。

外科・整形外科・リハビリテーション科・肛門科

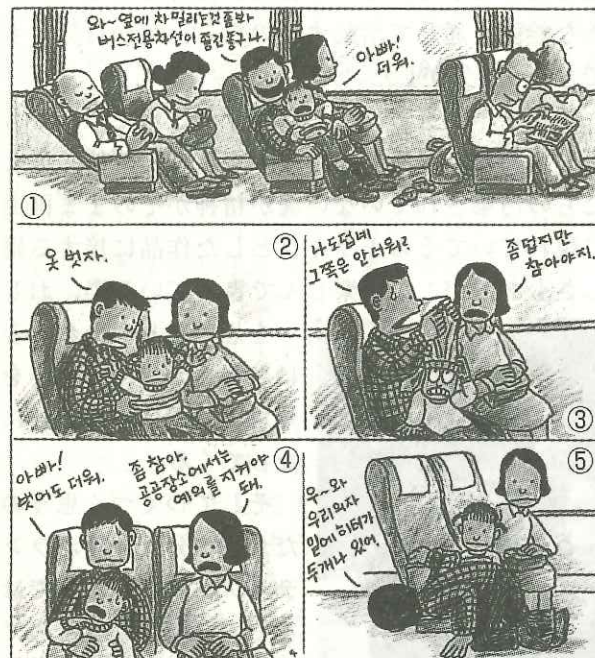
LEE CLINIC 李クリニック

〒544-0001 大阪市生野区新今里2-4-15
ミナヒロハイツ1階
TEL 06 (6751) 0558

診察時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00～12:30	○	○	○	○	○	○
午後 4:00～7:00	○	○	○	×	○	×

<休診> 木・土曜日 午後・日曜日・祝日

손발이 맞아야 步調を合わせて



- ①わあ。
横の車の混んでいるちょっと見てごらん。
バス専用車線がいいよね。
アッパ、暑いよお
- ②服脱ごう
- ③僕も暑いんだけど、そっちは暑くないの？
少し暑いけど我慢しないと
- ④アッパ、脱いでも暑いよ。
ちょっと我慢して。公共の場所では礼儀を守らないと。
- ⑤うわー、僕たちのいすの下にヒーターが2つあるよ。
- ⑥7、8番座席の下のヒーターを少し低くしてよ。
あまりに暑いよ。
ちょっと我慢してよ。他の人のことも考えてよ。
- ⑦僕がバスを作るならヒーターの熱が均等に分散させるように作るよ。ハエリン、暑かったらみんな脱いで。
だめです。守るべきことは守らないと。歩調を合わせて教育をさせないと。
- ⑧オンマ、アッパ、ケンカしないでよ。ケンカをせずに平等夫婦賞もらったんでしょ。



作者：崔正鉉（ちえ・じょんひょん）
パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。
1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。

ご支援くださった方々のお名前

（1999年度・1999年4月1日～2000年3月31日 50音順 敬称略）

いつも聖公会生野センターのために、お祈りご支援くださりありがとうございます。
教会・グループなどで取りまとめてご支援くださった方のお名前は載っていませんが、あわせて感謝申し上げます。

後援会

相原太郎 青柳哲夫 青柳正宏 青柳美智子 秋山波子 芦沢すま 東敏勝 東直子 安達宏昭 アトリエIK 尼子美喜 尼子ユリコ
天野雪子 天野由美 荒川昌佳 荒川義郎 有村一夫 李昌雨 飯田修 飯田茂信 生野センター横浜教区友の会 石井義雄 泉迪子
泉田恵美 伊勢田健 一花恭子 伊藤幸雄 井上真也 井原洋子 今川宏子 今北富三 今中富美子 今中喜子 今村祥子 林芳子
岩井梅代 岩城聡 岩垂悦子 岩本英 植松從爾 植松誠 梅原賀代子 江野隆夫 呉栄一 大内恵子 大方聡 大川千鶴 大阪教区
連合男子会 大阪聖アンデレ教会 大阪聖アンデレ教会婦人会 大阪聖パウロ教会婦人会 大阪聖パウロ教会有志の会 大嶋果織
太田淑子 太田喜元 大谷タカコ 大野高史・寿美 大野和香子 大野和子 大橋博子 大山仁躬 岡野利治 岡本勝 小川博司
興津健蔵 奥康功 奥田哲夫 奥村好子 小倉真市 納トヨ 小田原聖十字教会婦人会 小野晶子 小野綾子 香川一憲 景山恭子
梶原史朗 柏原美男 片山春美 葛城文子 金山昌照 金光秀晃 加納実 軽井沢ショー記念礼拝堂 川上竹治 川村直子 姜富三
姜恵楨 木川田一郎 北関東教区宣教師 北山和民 北山成子 橋高紀雄 衣笠奈良美 金必順 金文秀 鬼本照男 日本聖公会京都
教区教務所 国津恵美子 国津進 久保道則 久保潤彦 倉本和 栗山義信 黒田昇 玄後市四郎 河野裕道 河野芳孝・紀子
神戸聖ミカエル教会 越賀智恵子 越山健蔵 後藤真 小西正人 小林克則 小林幸子 小林満寿子 小ひつじ乳児保育園 小堀孝子
小堀肇 小松二三子 小室一 近藤悠紀 齊藤壹・祥子 堺聖テモテ教会 桜井揚子 佐々木宏之 佐治孝典 札幌聖マールガレット教
会 佐藤悦子 佐藤時彦 佐藤信行 佐野信三 鮫島留美 猿橋靖・正子 志賀成全 洪川良子 島田麗子 下条登代子 社領共美
白石敏子 城下彰 代谷宣子 菅田睦子 菅原与志一 杉原達 杉本美津子 鈴木慰 鈴木靖夫 聖バルナバ病院礼拝堂 関本肇
瀬山義美 多方清子 高田須磨雄 高橋敏子 鷹見作平 高見澤國子 高宮建治 瀧山恒雄 武市温子 竹内信義 竹中達吾 竹林経
一 田中恒久 谷富夫 谷井尚子谷元郁子 崔吉子 近澤淑子 千種百合子 茶本博史 張聖子 張東煥 筑田克夫 辻節子 辻文雄
辻本敏子 辻本秀子 恒光昌彦 坪井克己 東光学園 藤間孝子 東峰多寿 トータス・ハウス 徳田弘幸 富谷晋 富満美佐子
豊川雅章 豊田英子 内藤昇 中芝永次 永嶋大典 中西久忍夫 中野香津子 長野加代子 中野ノブエ 中野三枝子 長野泰信
中原恵 仲村實明 中村大蔵 名古屋学生青年センター 南金松 西台宏 西中誠一郎 西宮聖ベテロ教会婦人会 西村逸郎 西元マ
サエ 丹羽美恵子 直川義人 野田一 野村潔 萩ルイ子 博愛社 橋本義彦 早川四郎 早川善樹 橋本恵子 春名英
夫 坂東長輝 東豊中聖ミカエル教会 東豊中聖ミカエル教会婦人会 樋口敏夫 飛田雄一 日高八重子 平賀てる子 平田徹 平野
淳子 博田良 廣政博 黄裕錫・金幸子 福岡教会婦人会 福田稔 藤木典子 藤谷正一 古本純一郎 古谷利治 べんぎんべり館
芳我秀一 穂積裕子 堀貴美子 堀武 堀江富美 (株)マイチケット 前島素子 前田圭子 前田忠男 前田都 前原潔 牧口一
牧野正彦 牧野道信 益海政一 俣野恵子 松居勲 松井新世 松岡寿子 松原栄 松本一郎 松本文 松本正俊 松本信行 真鍋倫
子 三木メイ 水谷博彦 水野忠 水戸聖ステパノ教会 水口正樹 南康子 三村タミエ 宮川八重子 三宅肇 宮嶋公恵 宮嶋眞
宮野恵子 武藤六治 宗像和雄・千代子 邑上太紀子 村上喜代子 邑上亨 文公輝 森紀旦 森英雄・貞子 森美知 森園恵子
森田齊子 盛田トモ子 森中央 諸橋保夫 八尾恵三 山口佐栄子 山口博子 山崎ホシ子 山下直子 山田真弓 山根由香 山本勝
彦 山本眞 山本眞美子 吉田アサ子 吉田常夫 吉田フサ子 吉田雄亮 吉本恵一 米村路三 良善幼稚園 渡辺定夫

クリスマス献金

穂山加代 荒川佐智子 飯田修 石橋聖トマス教会 伊豆聖マリヤ教会 泉迪子 泉田恵美 一宮聖光教会 一花恭子 稲原三千
岩井梅代 岩本英 恵我之荘聖マタイ教会 大阪聖愛教会 大阪聖アンデレ教会婦人会 大野和子 岡崎敬子 岡野利治 岡本勝
奥田壮一郎 小倉真市 納トヨ 香川真澄 梶原史朗 柏原美男 加納実 神谷尚孝 川口キリスト教会 姜富三 木川田一郎 菊地
泰次 キム診療所 鬼本照男 清里聖アンデレ教会婦人会 栗山義信 小泉好子 河野裕道 神戸聖ミカエル教会 小林いつ子 小室
一 鮫島留美 三条聖母マリヤ教会 島田麗子 下鴨幼稚園 首里聖アンデレ教会 城下彰 辛淑玉 新生礼拝堂 菅井雄一 杉本美
津子 聖アグネス教会 聖十字幼稚園 聖パウロ教会 聖ルカ教会 染井正子 高木栄子 高槻聖マリヤ教会 鷹見作平 高宮建治
谷井尚子 谷元郁子 千種百合子 千葉復活教会 茶本博史 張東煥 東京聖テモテ教会奉仕会 藤間孝子 トータス・ハウス 徳島
インマヌエル教会 豊田英子 長岡聖ルカ教会 中島路可 名古屋聖マルコ教会 博愛社 橋本宣子 畑野栄一 春名英夫 平賀て
子 平野淳子 黄裕錫・金幸子 福岡教会 福永芽久美 藤木典子 藤田剛一 二葉幼稚園 古本純一郎 平安女学院中・高宗教セン
ター 芳我秀一 前島素子 前田圭子 増山悦子 松居勲 松崎純二 松戸聖パウロ教会 松原栄 三木メイ 宮古聖ヤコブ教会 宮崎
光 宮嶋泰夫 宗像和雄・千代子 邑上太紀子 目白聖公会 桃山学院大学聖教主礼拝堂キリスト教センター 森中央 八木基督教
山口佐栄子 山根由香 山本眞美子 八日市場聖三一教会 横内洋子 ヨルダン保育園 立教女学院 渡辺定夫

一般献金

穂山加代 安達宏昭 阿部雅良 磯崎久 稲荷山諸聖徒教会 梅原賀代子 大阪教区婦人会 大阪聖パウロ教会有志の会 大野和子
小倉真市 景山恭子 金宮春子 姜富三 紀ノ川聖公会五教会合同礼拝堂施金 金鉄雄 京都教区教役者会施金 草ヶ江幼稚園
栗山義信 小林克則 小林宏治 小室一 櫻井三恵子 桜井揚子 須佐美浩一 藤間孝子 豊田英子 新潟聖パウロ教会 二藤節子
日本キリスト教協議会 日本聖公会婦人会 橋本宣子 原田光雄 増山悦子 松村公子 松本一郎 宗像和雄・千代子 村上義夫
百井幸子 桃山学院聖アンデレ礼拝堂 山崎ホシ子 大和谷寿義江 山野繁子 山本頭子

聖公会生野センターのための
チャリティーコンサート

Heart to Heart

心から心へ

第1部 愛の歌のメッセージ
アヴェ・マリア
世界の愛の歌

第2部 クラシックへのお誘い
歌劇「フィガロの結婚」より

出演 坂口素里 (関西二重奏)
伊藤 正 (関西二重奏)
前田幸子 (関西二重奏)
宮嶋聡子 (関西二重奏研究生)

ピアノ 小野田美子
荒川真紀

編曲 荒川真紀

2000年6月11日(日)

14:00~15:30

日本聖公会 堺聖テモテ教会

堺市立寺町4丁目1-65
TEL 0722-61-2015

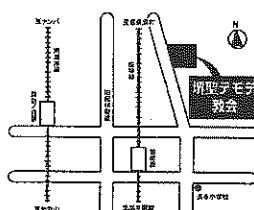
共催 聖公会生野センター
聖公会生野センター大阪校後援会
日本聖公会堺聖テモテ教会



坂口素里ソプラノ



伊藤 正バリトン



南海本線「難波」駅より徒歩5分
阪堺線「船尾」駅より徒歩2分

【ご協力いただく方法】
当日会場におこしいただいた方に、
チャリティー献金をお願いいたします。

お子さま連れでもご遠慮なくご参加ください。

お問い合わせ
聖公会生野センター TEL 06-6754-4356

聖公会生野センター支援のため

夫婦同伴文化はなぜ根づかなかったのか
…人間らしく生きるために…



木津川計さん

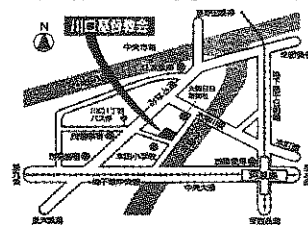
(立命館大学教授・『上方芸能』代表)

講演会

2000年7月23日(日) 14:00~

日本聖公会 川口基督教会

入場協力費 1000円



主催：日本聖公会川口基督教会

お問い合わせ：川口キリスト教会

TEL (06) 6581-5061

FAX (06) 6581-5061

余韻

ウルリム14号で、聖公会生野センターを支援するアイデアを教えてください。と呼びかけさせていただいたところ、さまざまな方々からいろいろ寄せられました。上の2つの催し物も、聖公会生野センターを支援する目的で開催されます。また、今回からウルリムをA4版にし広告が入りました。これもそのアイデアのひとつです。ご支援ありがとうございます。みなさまのお知らせにもご活用ください。

ウルリム14号4ページ『人との出会いに癒されて』を執筆して下さった豆子寿士のお名前が間違っていました。大変申し訳ありません。豆子さんをはじ

めみなさんにご迷惑をおかけしました。お詫びし訂正いたします。

今回の香山さんのお話にあった大韓聖公会の分かち合いの家から今年も2名の研修生が4月28日から7月までの予定で聖公会生野センターに来ています。研修の準備などをしながら分かち合いの家の活動の分野の広さを感じます。それだけ必要とされることが多いのです。日本でもそれは同じ。聖公会生野センターもより多くの人とのかかわりの中で、活動に結んでいきたいと思ひます。(すずき)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno.po@nsskk.org

http://www.nsskk.org/province/ikuno

発行人：木 村 幸 夫

編集人：大 橋 襄